

S.6.8.25 尾瀬めぐり【5】

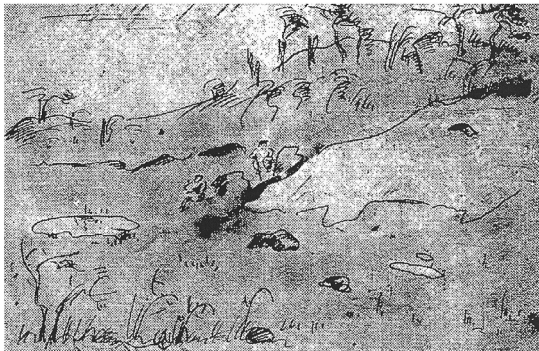
タイトル絵

大下藤次郎の碑

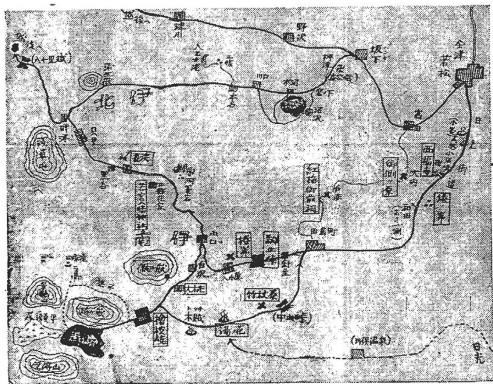


S.6.8.27 會津駒ヶ嶽の花園②

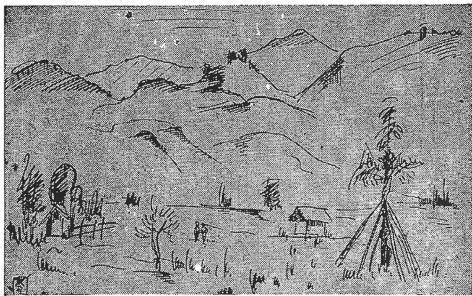
絵 駒の墓



S.6.8.28 南會と高倉宮以仁王(上) 絵 高倉宮以仁王潜行記附図



S.6.8.29 南會と高倉宮以仁王(下) 絵 浅草山



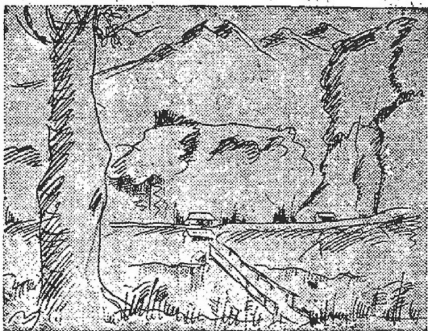
S.6.8.30 水田創始の譽

タイトル絵

沼澤沼へ行く

道より見下ろ

した村の一部



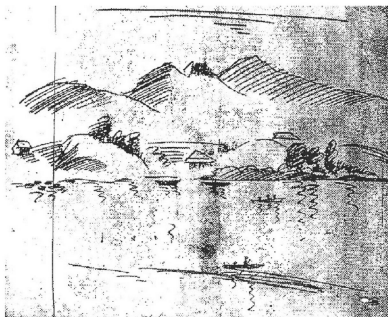
S.6.8.31 沼澤沼は唄ふ

タイトル絵 沼澤沼

沼の仙人



S.6.9.1 沼澤沼の縁起・沼御前神社 (完)



S.6.8.5 旅を終えて 8/3 福島駅にて

お互に「御苦勞さま」の握手
 班がいよく、節節し本既編て原い、握手を交はしたところへ、右眼
 田、左小林南君、上は藤田の「行、節節左端中目遊長その右から
 熊田君、小林君、小林君のお母さん



藤田大三
 暑さは一日／＼増してくる。荷
 の人々は、この無気味の車で、
 密いである。そうして、涼しい服
 を、血汗になつて、脱しまはつて
 いる。彼はさうした人達に心腹を
 開け、雨を見と、其處には、尤も
 自然の介障ノ雨音法があるではな
 いかと叫びたい。
 只夏の間をよれば、暑だ。う
 ぐひすが鳴く。仰白く谷川が流れ
 てる。腹一杯のむ。いくら飲ん
 でも、喉も文句は言はない。死
 の水だ。
 それから、無量の暑がある。山
 の水やが、待つてゐる。あの屋敷
 の神地には、彼が我んで来る。一
 期も早く、あの野天地向へ、行く事
 だ。そこには、釣針たな々が待つ
 てる。村長さん始め、村長を呼
 びての腹置。その温かい心にかたむ
 か涙を流したことが。
 私は最後に、太鼓の雨音やを、
 決して忘れてはならない。と言ふ
 亦を私自身身が、彼に對して強く
 叫びたいと思ふ。

